

わが道をいく

遠藤 勇 司

奨励者紹介〔えんどう・ゆうじ〕

日本キリスト教団希望ヶ丘教会牧師

梅花中学校聖書科講師

人の言うことをいちいち気にするな。

そうすれば、^{しもべ}僕があなたを呪っても

聞き流してられる。

あなた自身も何度となく他人を呪ったことを

あなたの心はよく知っているはずだ。

（コヘレトの言葉 7章 21—22 節）

1、自己紹介

2013年から、泉北ニュータウンにある希望ヶ丘教会で牧師をしています。5年前から、梅花中学校・梅花高等学校で週1回、聖書の授業も担当しています。2021年の2月、父の病が進んでいたことが分かり、教会と梅花での働き以外を整理することにしました。博士課程での学びを始め、さまざまな働きをすべて整理し、「ああ、すっきりした!」と感じました。

実際に辞めてみて分かったのは、「あれも実現したい、これも実現したい」とたくさんの道を同時に究めようと欲張っていたことでした。さまざまな働きを整理して、ようやく「自分の道を歩みだした」と思ったのですが、父の病状がおちつくと、今度は母が歩けないほど足が痛むようになりました。逆に母の足の状態がおちつくと、父の方の病状が進むという、悪循環のシーソーのような状態で、両親への介護を中心とした生活が始まりました。

2、父の在宅ケアのはじまり

約2ヶ月前に、父は足の痛みを訴え、階段を独りで上がれなくなりました。後ろからお尻を押してようやく教会の2階の牧師館にたどりつく有り様です。2週間前には、2度トイレで尻餅をつき、自力で立つことができなくなりました。その直後、在宅医療、訪問看護、入浴介助のサービスを開始しました。自力で起き上がることができず、食事がほとんど喉を通らなくなりました。近くに住む姉が夜泊まって介助し、昼間は私と母を中心にケアを継続しています。

さて、2週間前に、いきなり父の在宅ケアが始まってしまい、母も僕も戸惑うことばかりでした。父は時々訳の分からないことを言い出したり、身体の位置をなおしてもらったかと思うと、5分後には「お尻が痛い」と言い出したり。昨日も「額の汗を拭いてくれ」というので、温かいおしぼりで拭くと「温かいのはダメ」という。冷たいおしぼりもダメ。なぜだかよく分からないが、乾いたハンカチはOKだということです。戸惑

いは深まるばかりでした。

しかし、人生は悪いことばかりではないことも今回の在宅ケアで発見しました。たとえば、僕と妹2人で父を立ち上がらせることができなかった翌日、入浴介助サービスの2人のスタッフが父をヒョイと持ち上げ、180度回れ右をして、ボートのような浴槽に着地させる。3人のスタッフが手分けして、父のひげ剃りまでやってもらう45分の入浴サービスは、僕にとっては「神業」のオンパレードでした。別の日、訪問看護

師が^{じよくそう}褥瘡になりそうな父のお尻に軟こうを塗った後、「すみません。ラップありませんか」と聞いてきました。「ラップありますけど（一体何に使うんだろう・・・）」と渡すと、父のお尻の軟こうの上に小さく切ったラップをのせ「ラップが一番良いんですよ」と笑顔で答えていました。

90歳の父の頭がハッキリしているのも幸いでした。介護者に感謝と、たまにジョークを交える余裕がありました。今朝も歌を歌いながらうがいをしていました。一番驚いたのは、唐突に父が『炭坑節』を歌いだしたことです。「ついに頭おかしくなったのかなあ」と思っていたら「トイレが出た」ことを知らせてくれたのです。徐々に弱ってきているものの、明るく笑いながら、彼らしい最期を家で家族と共に過ごせることを願っています。

3、聖書が示してくれる「わが道を行く」ためのヒント

さて、父の在宅のケアを始めてみると、関わっている人々が言うことに微妙なズレがあることに気づきました。たとえば点滴を「毎日」して欲しい家族と、「週3日」という医療者。どちらも正しそうなのですが、それぞれの主張が対立しているようにも感じました。延命治療は嫌という父の命を預かり、どういう選択肢が父のために良いのか、悩ましく感じていました。そんな時に思い出したのが、今日の聖書の言葉です。

「人の言うことをいちいち気にするな」（コヘレトの言葉7章21節）。

コヘレトの言葉は、どれほど正しく聞こえる声であったとしても、「人の言うことをいちいち気にせず」、むしろあなた自身の道を歩んでいきなさい、と僕たちを力づけてくれています。

4、父へのケアは「老人」へのケアではなく、「超人」へのケア

さて最後にカトリック司祭の晴佐久昌英さんのエッセイの中で、いわゆる「老人」に対する意識を変えてくれた文章を紹介したいと思います。

老人という呼び名は、あまりにマイナスイメージがつきすぎていて、あの年代特有の本質的に解放されたあり方を表すのにふさわしくない。小人、大人、ときたのだから、次は「超人」とでも呼ぶべきだ。すなわち、まだ体が小さく心も成長過程なので、小人。体が大きくなり心もできあがって、大人。ならば、肉体の大小優劣を超え、できあがった心も超えて真の自由と真の知恵を獲得する年代を超人と呼んでも、それほどおかしいことではないだろう。（中略）若いころは、人の役に立ち、評価されることが大切だと思っている。そのために膨大な時間と労力を注ぎ、他人の評価に一喜一憂している。しかし超人は、一見何の役にも立たないこと、だれにも評価されないことのうちにこそ、大切なことが隠されていると知っている。だから、超人のまなざしは優しい。（晴佐久昌英「老いる」『星言葉』女子パウロ会 1997年 24～25頁）

父の在宅ケアを「老人介護」ととらえるのではなく、「超人」から人生のしめくり方を教えてもらっている、ととらえることができた時に、心が少し楽になりました。わが家の「超人」のまなざしが優しいままで、最期まで接することができるという希望がわいてくるのです。

みなさんが悩みを抱えた時の参考にしていただき、「人の言うことをいちいち気にせず」、それぞれの道を歩めるように願っています。

2022年7月6日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録